

青山讃頌舎令和元年秋展

絵で観る俳句

穂月明作品でたどる俳句の歴史



青山讃頌舎令和元年秋展

絵で観る俳句―穂月明作品でたどる俳句の歴史―

俳句（俳諧の発句）は芭蕉によって詩として完成したと言われます。その俳句の多くは情景を詩的に描写する手法をとっており、句を鑑賞すれば場面が思い浮かぶものが多くあります。芭蕉自身も自作の句に絵を付けていますし、中興の祖と言われる蕪村は画家でもありました。俳句のビジュアル化は芭蕉の頃から行われていました。穂月明も俳句を題材にして多くの作品を手がけています。題材にした俳句も芭蕉から現代に至るまで時代を追って取り上げています。今回の展覧会では穂月明がビジュアル化した俳句を中心に、絵を見て楽しみながら俳句の魅力と歴史に触れて頂きたいと思います。

絵にすることで俳句をより素直に理解でき、新たな魅力に出会えると思いますし、俳句によって絵をより理解していただけるでしょう。

ここで一句でもお気に入り作品に出会って頂けましたら幸いです。

一般財団法人東洋文化資料館青山讃頌舎

理事長 穂月大介

1. 芭蕉の俳諧ができるまで

俳句のルーツは万葉集の和歌にまでさかのぼれます。和歌から仲間を句を繋いでいく遊び「連歌」が始まり、その中から俗語や駄洒落、下ネタ満載の「俳諧の連歌」が生まれ、庶民に広がります。俳諧とは滑稽という意味で、「俳諧の連歌」は今で言う「連句」です。

春雨はいたくな降りそ桜ばな

いまぞ見なくに散らまくをしも

万葉集



穂月明「春雨」 青山讃頌舎蔵



穂月明「鉢中の天」 青山讃頌舎蔵

偈

春有百花秋有月

春に百花あり秋に月あり

夏有涼風冬有雪

夏に涼風あり冬に雪あり

若無閑事挂心頭

もし心頭にかかる閑事無くんば

便是人間好時節

すなわち是れ人間の好時節

無門慧開

* 閑事…つまらないこと

* 心頭…心の中

* 人間…人の住む世界

和歌や俳諧が広まっても教養の基本は漢詩漢文です。「論語」等の儒教の教科書は無論漢文ですし、杜甫、李白、蘇軾(蘇東坡)等の漢詩もよく知られていました。日本でも儒学者や禅僧、武士も公家も盛んに漢詩・漢文を作っています。右「鉢中の天」の賛は禅の公案集「無門関」にある禅の境地を表した漢詩「偈」です。禅の教えも教養として広がり茶掛けなどにされるようになります。例えば此の漢詩の一節「人間好時節」もその一つです。



眼裏有塵三界窄

眼裏に塵有れば三界窄く

心頭無事一床寛

心頭無事なれば一床寛し

世中はとてもかくても

おなじこと宮もわら屋も

はてしなれば

山崎宗鑑筆

伊賀市蔵



詠河上落葉

和歌 季吟

おしと見て

手まつさえざる盃の

おもかげうかぶ

せゝのみぢば

北村季吟筆

伊賀市蔵

2. 芭蕉以後・江戸の俳諧

月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。舟の上には生涯を浮べ、馬の口とらへて老を迎ふる者は、日々旅にして旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風に誘はれて、漂泊の思ひやまず。

文松尾芭蕉『おくのほそ道』



穂月明「おくのほそ道」 青山讚頌舎蔵

芭蕉の時代の俳諧と芭蕉の功績

室町末期、山崎宗鑑や荒木田守武は「俳諧の連歌」を連歌とは独立したジャンルとして確立します。山崎宗鑑は前句「ぎりたくもありぎりたくもなし」に付けた

・盗人を捕らえてみれば我が子なり
がよく知られています。

江戸の初め俳諧の小品な部分を押さえた松永貞徳の貞門俳諧が大きな勢力となります。芭蕉の師とされる北村季吟も貞門俳諧です。

芭蕉の時代、貞門俳諧よりさらに自由な俳風の談林俳諧（西山宗因や井原西鶴）が現れ芭蕉もこれを学びます。ですから芭蕉も貞門風や談林風の句を多く作っています。

芭蕉の時代の「俳諧の連歌」は駄洒落や古典のパロディー、流行語を織り込んで滑稽な句を仲間（座）で繋いでいく言葉遊びの文芸、いわば俗な文芸でした。その初めの句は「発句」と言い、特に大事にされ単独でも鑑賞されていました。

やがて芭蕉は発句を「俗」を残したまま「詩」へと昇華させます。蕉風俳諧の誕生です。芭蕉は大人気となり、江戸時代そして今も顕彰され続けています。今の「俳句」を芭蕉が創り上げたと言つて良いでしょう。

月はやし梢は雨を
待ちながら
芭蕉句



種月明「月光雲松」 京都府立山城郷土資料館蔵

葛の葉のおもて

みせけりけさのしも

松尾芭蕉句自画賛

天理図書館綿屋文庫蔵



訳は「和歌で風に翻って裏を見（恨み）せると言われる葛の葉が今朝の霜で白く面を見せている」。背いた高弟風雪に対する許しの句とも言われる。芭蕉自筆の絵も秀逸で墨の笹に薄紅の葛と薄青の葛の葉を描いている。俳画の傑作。

芭蕉と門人達

発句は単独で鑑賞される様になるとは言っても、江戸時代を通じて俳諧の連歌（連句）の最初の句と言う位置づけです。そして俳諧の連歌は皆が集まった「座」の中で作られ楽しめます。発句を作る時も芭蕉は多くの門人とディスカッションを重ね作っていったようです。芭蕉は江戸や故郷伊賀、また招かれた各地にも門弟がいました。芭蕉はそうした門弟たちと独自の芸術性の高い蕉風俳諧を完成していきました。

松尾芭蕉（寛永21生）

史上最も有名な俳人。伊賀出身。江戸に出て俳諧宗匠となり全国に名を馳せた。江戸と伊賀を幾度も往復、又、各地を旅し句を詠み紀行文を残しているが『奥の細道』は特に名高い。蕉風俳諧の祖。

- ・ 夏草や兵どもが夢の跡
- ・ 古池や蛙飛びこむ水の音

* 「待ちながら」 賛の句は芭蕉作『鹿島紀行』に「月はやし梢は雨を持ちながら」として掲載されています。月見の時ずっと雨でやっと月が出てきた状況で詠んだ句として載っているので「待ちながら」となるのです。しかし芭蕉も一つの句を何度も手直しており、また後世間違えて伝えられているものも有ります。種月明の見た参照文献に「待ちながら」と有ったのだと思われれます。



野にさけば野に
名を得たり梅の花

支考句筆

伊賀市蔵

各務支考（寛文5生）

芭蕉の最期を看取った美濃の門人の一人。俳論を多く書いた。

・歌書よりも軍書にかなし芳野山

古道をみかへる

松のみどりかな

其角句

宝井其角（寛文元）

芭蕉の一番弟子、都会的な句で

芭蕉一門を支えた人気の俳諧師。

・越後屋に衣さく音や衣更

・傘に埒貸さうよ濡れ燕



種月明「松林」 青山讃頌舎蔵

しぐれけり

走り入りけり

晴れにけり

惟然坊句

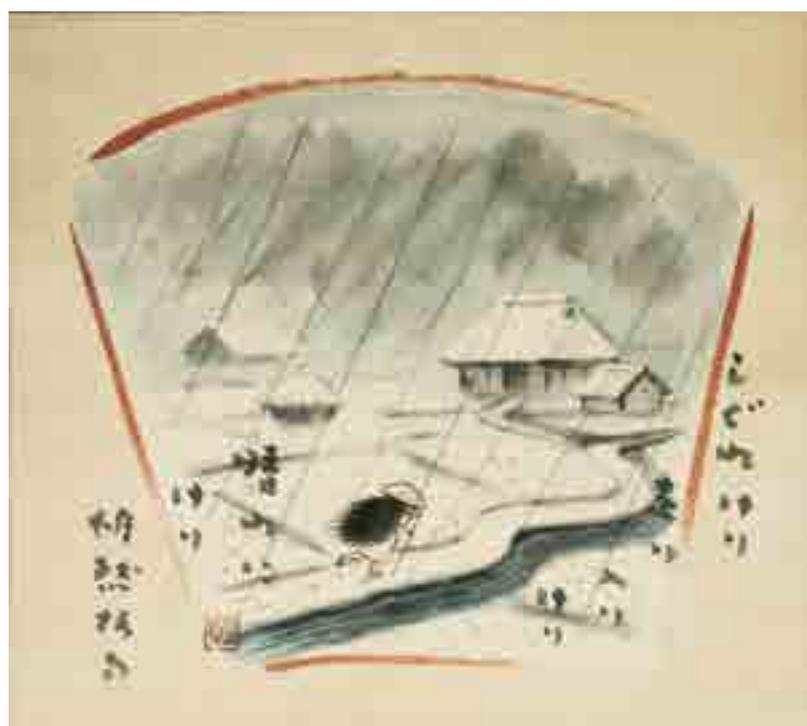
広瀬惟然（慶安元生）

芭蕉晩年の弟子、芭蕉の「軽み」を実践しようとした。

句も人柄もひょうひょうとした風狂人だったようだ。

・水鳥や向かうの

さしへつういつい



種月明「時雨図」 青山讃頌舎蔵



伝与謝蕪村筆「芭蕉涅槃図」
芭蕉翁頭影会蔵

与謝蕪村と蕉風の継承

蕉風は江戸時代何度も復興されますが、その中でも与謝蕪村は中興の祖として取分け有名です。芭蕉亡き後も才能豊かな門人達が活躍するのですが、その後新鮮味が無くなっていききました。芭蕉の提唱した素直な句作の「軽み」も目の前の事を詠む句作も表面だけまねたのでは平板な句ばかりになってしまいました。蕪村は漢籍や虚構を大胆に取り入れ新風を吹き入れます。常に変革することこそ蕉風を継ぐことなのです。蕪村は超一流の画家でもありました。上の絵は芭蕉を釈迦に見立て、周りを弟子や師匠、句に詠まれた動物たちが囲んでいます。

与謝蕪村（享保元生）

- ・ 菜の花や月は東に日は西に
- ・ お手討ちの夫婦なりしを更衣



穠月明「孤月鐘聲」 青山讃頌舎蔵

鐘氷る尾の上の

寺や月孤つ

召波句

黒柳召波（享保12生）

蕪村の弟子で漢詩を能くした。

- ・ 初氷許由此朝掬すれば

*許由：中国古代、伝説の隠者



穠月明「軒の梅」
青山讃頌舎蔵

軒の梅イめば

たたず

犬の吼にけり

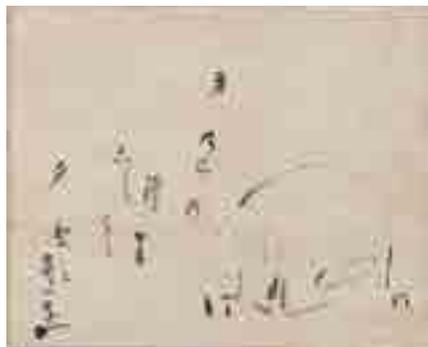
関更句

高桑関更（享保11生）

蕪村と同時代に蕉風復興に貢献した。

- ・ 蝉の音も

煮ゆるがごとし
真昼かな



身の上の鐘とも

しらで夕涼み

家も一茶

伝小林一茶句自画賛 伊賀市蔵

小林一茶(宝暦13生)

芭蕉、蕪村とならぶ江戸時代を代表する俳人。江戸末期の人。正岡子規にも注目した。
・ 我と来て遊べや親のない雀

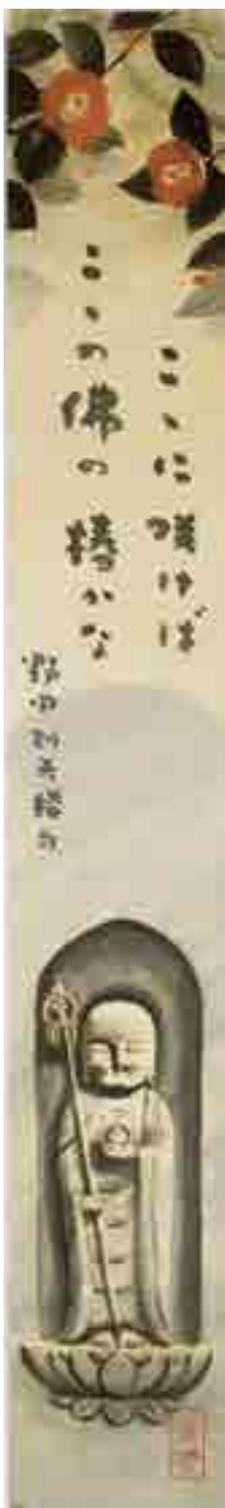
3. 俳句誕生・正岡子規以後

明治の俳句革新運動と正岡子規

明治の文明開化は日本の芸術に「自己」の概念を持ち込みます。子規は、発句は自己表現であり芸術だが連句は芸術ではないと切り捨て、「発句」を「俳句」として独立させ短詩形文学として確立します。また、技巧的陳腐さに陥っていた江戸期から続く俳諧(月並俳諧)に対し、再び「写生」を取り入れて詩として刷新し、俳句革新運動の機関誌として雑誌「ホトトギス」の刊行に尽力します。子規亡き後は高浜虚子に引き継がれ、虚子は「客観写生」を提唱し主流となります。一方で新傾向俳句や自由律俳句運動も起こります。

こゝに咲けばこゝの佛の椿かな

野田別天楼句



穉月明「野の佛」
青山讃頌舎蔵



穉月明「風柳図」 青山讃頌舎蔵

六月を

奇麗な風の

吹くことよ

子規句

正岡子規(慶応3生)

明治の文学者。俳句・短歌に近代文学としての位置を確立した。

- ・ 柿くへば鐘が鳴るなり法隆
- ・ 鶏頭の十四五本もありぬべし

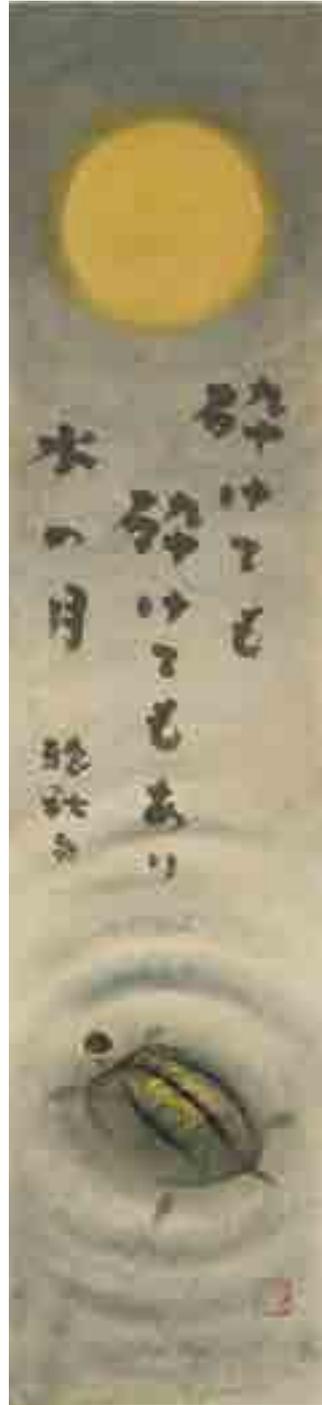
野田別天楼(明治2生)

子規の指導を受け「ホトトギス」に投句。俳諧研究者。

- ・ 露光る夕あるきすこし
- 酔うてゐる

砕けても砕けてもあり水の月

聴秋句



穉月明「水の月」
青山讃頌舎蔵

上田 聴秋（嘉永5生）
江戸期の月並俳諧の流れを汲む明治の俳人。京都で活躍。
上の句は理屈で作った月並俳諧的な句とも言えるが、月は古来仏の真理を表すもので穉月明は仏法の普遍性を詠つたものと解したようだ。

・ 秋寒やあるだけ着たる旅衣

4. 自由律俳句

自由律俳句運動と裸木

自由律俳句は自己表現のためには五・七・五のリズムも季語もこだわる必要はないとし、相應しいリズムを自分で作る俳句です。荻原井泉水が中心となり種田山頭火や尾崎放哉が参加しましたが、井泉水が大事にしたメンバーに大橋裸木がいます。裸木は一時療養のため阿保の大村神社のすぐ下に住んでいました。

釣鐘より霜どけの木がほっそり

裸木句筆

個人蔵



大橋裸木（明治23生）

井泉水が中心となった自由律俳句の運動に参加、井泉水に信頼され活躍した。最も短い俳句の作者として知られる。

・ 陽へ病む
・ 蓑虫よ絵かきは絵の旅に出る



津市四天王寺裸木句碑



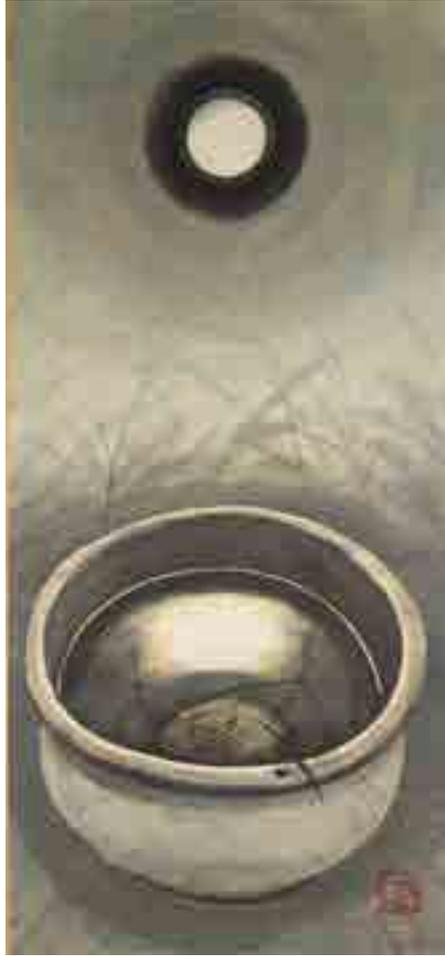
大橋裸木肖像写真

南無月光菩薩すすき一本たてまつる

井泉水句



種月明「ススキ一本」
青山讃頌舎蔵



種月明「鉢中の月」 青山讃頌舎蔵

松風に明け暮れの鐘撞いて

山頭火句



種月明「鐘堂」 伊賀市蔵

荻原井泉水（明治17生）
自由律俳句を提唱し「層雲」を主宰した。種田山頭火、尾崎放哉、大橋裸木の師。

・議論の中つつましく
柿むく君よ
・棹さして月のただ中

上図左の「鉢中の天」に賛は無いが蟹が月にススキを捧げてる。この絵も右の絵と同じ句を描いていると思われる。

生えて伸びて
咲いてる幸福
山頭火句

種月明「椿と梅」 伊賀市蔵



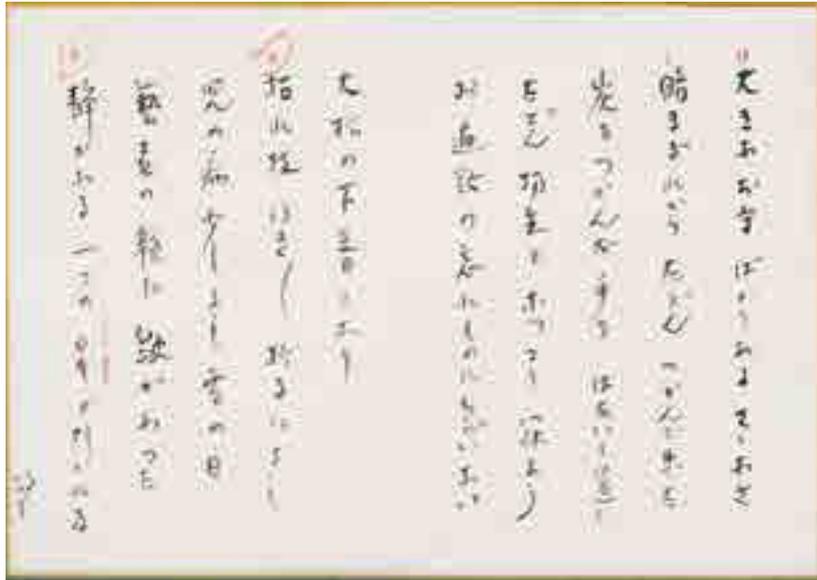


また一枚ぬぎすてる

旅から旅

山頭火句筆

伊賀市蔵



◎ 静かなる一つのウキが引かれる

放哉句筆

尾崎放哉句稿 伊賀市蔵

大きなお寺ばかりあるさゝなき
暗まざれからたどんつかんで来た
炭をつかんだ手をはたいて置く
たどん坊主とホッコリ寐よう
お遍路の忘れものにちがいない
大松の下春となり

◎ 枯れ枝ほさく折るによし

児の病少しよし雪の日
芸者の顔に皺があった

あわきことみずのごとし
淡如水



種田山頭火筆
伊賀市蔵

種田山頭火(明治15生)
最も有名な自由律俳人。僧籍に入り放浪した。右の短冊「淡如水」は古事からの引用で、山頭火が大事にしていた言葉と言つ。
・うしろすがたのしぐれてゆくか
・分け入つても分け入つても青い山

「放哉句稿箱書」
放哉居士詠草



荻原井泉水筆
伊賀市蔵

尾崎放哉(明治18生)
山頭火と人気を二分する自由律俳人。東大出のインテリだが僧籍に入り隠棲。師の井泉水は放哉の没後に句集「大空」を出版。上の原稿の赤丸はその時、井泉水が付けたものだろうか、赤丸の二句は「大空」に掲載されている。
・咳をしても一人
・いれものがない両手でうける

5. 近現代の俳人たち

空林に大きな月や木菟づくの声

石橋忍月句

石橋忍月（慶応元生）
文芸評論家、森鷗外との論争で有名。



種月明「月光木菟図」 青山讚頌舎蔵

冬菜洗ふあたりの濡れて昼の月

蒼石句

松村蒼石（明治20生）
「ホトトギス」の代表作家である
飯田蛇笏の高弟。
・ たわたわと薄氷に乗る鴨の脚



種月明「青菜」 青山讚頌舎蔵

橙も

鼠が抱けば

宝珠かな

鶯池句

垣上鶯池（元治元生）
子規に傾倒し「ホトトギス」
に投句。上越俳壇で活躍。

種月明「橙」 青山讚頌舎蔵





種月明「寒雀」 伊賀市蔵

けふの糧に
幸足る汝や
寒雀
杉田久女句

杉田久女（明治23生）
「ホトトギス」を代表する
最初期の女性俳人。後に「ホ
トトギス」を除名された。
作風は格調高く花やか。
・足袋つぐやノラとも
ならず教師妻
・^{こたま} 飮して山ほととぎす
ほしいまま
*ノラ：「人形の家」の主人公



種月明「西瓜割り」 青山讃頌舎蔵

雲一つなき日ざかりとなりけり

川上梨屋句

川上梨屋（明治34生）



種月明「獅子舞」 青山讃頌舎蔵

あなたのおし
あなたおもしろと
獅子跳ねて

阿波野青畝句

阿波野青畝（明治32生）
昭和初期の「ホトトギス」を代表する
俳人の一人。作風は古典的で庶民的だ
が抒情がある。
・モジリアニの女の顔の案山子かな
・牡丹百二百三百門一つ



種月明「はたた神」 青山讃頌舎蔵

はたゝ神
七浦かけて
響みけり
日野草城句

日野草城（明治34生）
斬新な句で知られ「ホトトギス」の選者となるが後、除名される。新興俳句運動を主導した。
・うらゝかな朝の焼麴麴はづかしく
・恍惚として速力に乗ってゐる

翡翠とぶその
四五秒の天地かな
楸邨句

加藤楸邨（明治38生）
芭蕉祭献詠句選者。「ホトトギス」と対立した新興俳句運動の水原秋櫻子に師事、人間探求派の一人。
・翳雲人に告ぐべきことならず
・火の奥に牡丹崩るるさまを見つ
戦争を詠んだ句も多く右は家を焼かれた時のもの。



種月明「翡翠」 青山讃頌舎蔵

鬚はねて太長し
飾海老

松本たかし句

松本たかし（明治39生）
能楽師の家に生まれるも病気のため家業を断念し俳人となる。虚子に師事、客観写生を学び「ホトトギス」で活躍。作句は格調高い。
・チチポポと鼓打たうよ花月夜
・洪柿の滅法生りし愚かさよ



種月明「海老図」 青山讃頌舎蔵



穉月明「秋の七草」 青山讃頌舎蔵

膝までの秋の七草

分けすゝむ

鷹羽狩行句

鷹羽狩行（昭和5生）

芭蕉祭献詠句選者。俳人協会名誉会長。都会的で理知的な句作で知られる。

・摩天楼より新緑がバセリほど



穉月明「月光梅花」 青山讃頌舎蔵

月光に触れて光らぬ梅ぞなき

蓼汀句

福田蓼汀（明治38生）

「ホトトギス」同人、日本各地の

山々を踏破した山岳俳人。

・お花畑断つ崖浴ひの縦走路

落花してすべての

花の地に還る

佐竹弘江句



穉月明「桜花」 青山讃頌舎蔵

ロシアで知られる芭蕉の俳句 —マイ・ミトウーリチ芭蕉を描く—

ロシアでも芭蕉の俳句は翻訳され広く知られています。ロシア画壇の重鎮で絵本作家として日本でも知られるマイ・ミトウーリチ氏が芭蕉の句を絵にしました。また日本の書家森本龍石氏とコラボした作品も制作しています。この度アートサロン・ムーザさんのご好意により、これらの作品を此所で紹介できますことに感謝申し上げます。

画 マイ・ミトウーリチ (一九二五生) 現代ロシアを代表する画家。モスクワ印刷芸術大学絵画科教授、ロシア芸術アカデミー会員。親日家としても知られる。旭日小綬章、I B A 銀賞、B I B 銀賞、ロシア国家賞等

書 森本龍石 (一九四〇生) 日本の書家。書風は斬新でモダン。国際交流に力を注ぎ各国で書の普及につとめた。北辰書道会創設者、ロシア芸術アカデミー名誉会員、キルギス国立大学名誉教授。作品はロシア芸術アカデミー、プーシキン美術館、ロシア国立東洋美術館、ウクライナ国立美術館など、多くの美術館に収蔵されている。



マイ・ミトウーリチ画 森本 龍石書 個人蔵

Луна - путеводный знак -
Прочит: "Сюда пожалуйста!"
Дорожный приют в горах.

月ぞしるべ
こなたへ入らせ
旅の宿



マイ・ミトウーリチ画 森本 龍石書 個人蔵

Старый пруд,
Прыгнула в воду лягушка.
Всплеск в тишине.

古池や
蛙跳びこむ
水の音



マイ・ミトウーリチ画 個人蔵

Тихая лунная ночь...
Слышно, как в глубине каштана
Ядрышко гложет червяк.

夜^{ひそか}ル竊^{ひそか}ニ虫は月下の栗を穿^{うが}ッ



マイ・ミトゥーリチ画
個人蔵

あらたうと
青葉若葉の
日の光

О священный восторг!
На зелёную, на молодую листву
Льется солнечный свет.



マイ・ミトゥーリチ画
個人蔵

旅鳥
古巢は梅に
なりにけり

Врон-скиталец, взгляни!
Где гнездо твоё старое?
Всюду сливы в цвету.

ロシア語訳 ヴェーラ・マールコワ
(перевод В. Марковой)

ふるさと伊賀に息づく芭蕉翁

「絵で観る俳句」展によせて

日本では必ず学校教育で一度は触れ、世界でも親しまれる「俳句」は、伊賀の地が生んだ芭蕉翁がその価値を高めた詩です。今回の「絵で観る俳句」展でも、芭蕉翁の句を、穉月明氏が絵画化した「おくのほそ道」や「月光雲松」が紹介され、芭蕉が現代の画家に与えた影響の大きさを物語っています。特に「月光雲松」は芭蕉翁の、
月はやし梢は雨を持ちながら

の句とともに描かれています。皓々とした満月を扇面の紙に描いており、悪天候の中、月を拝んだ感動を現代の画家が表現しているのを目の当たりにすることができます。

また、特別展示されるロシアの画家マイ・ミトゥーリチ氏が芭蕉の句から発想した絵は、芭蕉翁の句が異国でも親しまれていることを教えてくれます。特に、『奥の細道』の旅中、日光で詠んだ句として有名な、

あらたうと青葉若葉の日の光

は様々な種類の木で表現され、ロシアの画家による芭蕉翁の句の世界観に触れることができます。

絵と詩の関係は、古く中国の蘇軾が王維の絵を評した言葉

詩中に画あり、画中に詩あり

という言葉とともに、伝統的に語り継がれ、芭蕉翁やその門人たちもその考え方を大切にしてきました。現代では、文学と絵画は分け隔てられる傾向にありますが、古来、日本では一体のものとして鑑賞してきた、その姿勢を今回の展示から私たちは感じるることができます。

今回の展示にあたって、芭蕉翁記念館を利用し芭蕉翁顕彰会所蔵の資料もご活用いただきました。芭蕉翁を育み、その精神が受け継がれる伊賀の地で、今回の展示が開催され、その展示に関わることができましたこと、感謝申し上げます。

芭蕉翁記念館学芸員 高井悠子

協力者（敬称略）五十音順

本展の開催並びに図録の作成にあたり、次の方々から協力を頂きました。記して心より感謝申し上げます。

特に、片山ふえさん、北出楯夫さん、高井悠子さんには貴重な御助言を頂き、資料提供でもご協力いただきました。図録のほとんどの写真は石田又久さんに撮っていただきました。重ねて感謝申し上げます。

アートサロン・ムーザ 鷹羽狩行

石田又久 天理大学付属天理図書館

北出楯夫 芭蕉翁記念館

京都府立山城郷土資料館 (公財) 芭蕉翁顕彰会

青山讃頌舎令和元年秋展
「絵で観る俳句」

発行日 令和元年九月十四日

編集発行 一般財団法人東洋文化資料館 青山讃頌舎

〒五一八〇三二三重県伊賀市別府七一八一五

TEL 0901986016432(穂月)

印刷 上野印刷(株)

高野山真言宗の中心
青山讀頌舎

<http://aoyamautanoie.net>